世田谷村日記

石山修武

三月二〇日　日曜日

昨夜は磯崎アトリエより送られてきた雑誌新聞記事読みふける。磯崎さんは七三才になっている。言動は本来のラディカル振りを増している。元ラディカルな人と言ってるがあれは怪しい。横浜トリエンナーレのディレクターを降りた一部始終が資料によって明らかにされている。新潮４、インターコミュニケーション52。昨年のｅｎ・ＴＡＸｉ08読み直してみた。筋が通っている。芸術世界のチェ・ゲバラだよ。アルジャジーラとのコンタクトもあるようだから、ビン・ラディンとのネット上の会見記などもいずれ読む事になるのだろうか。わからんぞ。午前中ＧＡギャラリーのドローイング仕上げる。十三時過、銅版画一点途中まで作業。午後西早稲田観音寺墓参り。帰って屋上に上り生ゴミ埋めと少し計りの土すき。十七時前まで。十九時前中野０ホール。いま歴史を問う　かつてと今の戦場の実相から　基調講演斉藤貴男。報告「南京戦・閉ざされた記憶を尋ねて」松岡環氏これも興味のない話し振り。深く演技してくれ。休憩をはさんで、相澤恭行君の「市民の見たイラク戦争」実質のうすい話しであった。思考いまだ浅し。マ、あの若さでは仕方ないとすべきか。ＮＰＯ活動の限界を露呈している。海南友子・中原大弐両氏のトークは大変よかった。北朝鮮日本語学校生が小泉・石原慎太郎と共にフーテンの寅を教材に日本を学んでいるという話しが面白かった。二人の話しは等身大で、ピースボートの実践、ＮＨＫ退職後のドキュメント映画製作の現場のリアリティーがあり出色であった。日本の若者は仲々捨てたものじゃないなと初めて実感した。閉会挨拶、ノーモア南京の会代表が話し始めた途端に最悪な予感あり遂に私は席を立って下の階に降りた。全くリアリティがなく、高見からの説教調の物言いに腹が立つばかりで、そのまま席に座っていたら、何か叫び出しそうな自分を感じたから。えらそうな事言ってるこういう奴が又、戦争を起こす可能性大なのだ。底の浅いヒューマニズムと堅苦しい教条、無思考の固まりである。二十二時過烏山に戻り、中華料理店で晩飯。二十三時半、世田谷村に戻る。

いわゆる平和運動が本当の力を持つ為には大きな演技力が必要だろう。例え、その身振りがエンターテイメントの趣きを帯びようとも。我孫子での小田実氏の話し振りも、すでに時代の速力に追いついてゆけぬモノを感じたのを思い出したりもした。古典的とも感じられる運動のスタイルがグローバリズム＝アメリカニズムに立ち向かえぬ現実を痛感した一夜であった。ピースボートの若者が東アジアの地政学的直観を述べていたのが唯一の収穫か。新潮４の短編小説を幾たりか中野に行く途中、そして南京の会の最中に読んだ。併読すると村上春樹のハナレイ・ベイの文体が群を抜いて方法的で、成程これはある種の世界性を帯びている事を読み比べて初めて実感させられた。コピーライトの域だなコレワ。開高健のサントリー文化の美文のレトリックを抜いてしまっている感じだ。描写する対象との距離感が他の作家とは違う。